

ITL NEWS

No.58

多様化するライティング教育の成果と新たな課題

本学のライティング支援の現状から課題を展望する

立命館大学教育開発推進機構 中島 英博

多くの学部で卒業論文が必修となる中、2019 年度全学協議会において「卒業論文・研究執筆に向けた文章作成能力の向上」が議論され、全学的なアカデミックライティング教育の推進が検討されました。図1が示すように、現在、学内には正課、正課外を含め、多くのライティング支援の取り組みがあります。また、正課外の支援は、正課で出された課題の支援を行うアカデミックな内容を扱うものから、就職のエントリーシート、奨学金や研究助成の計画書、資格試験のライティング課題など、ノンアカデミックな内容をカバーするものまで広く展開されています。

機能面から見ると、極めて充実した支援が提供されている本学ですが、学生からはどのように見えているのでしょうか。たとえば、日本語のライティング支援を提供する部門に英語のライティングを指導してほしいという相談があった例を考えてみます。「英語のライティング支援はこちらではなくあちらです。」このような機能面の立場を重視した助言を、教職員はしがちですが、学生は機能で支援を選んでいるのではなく、相談しやすい人に相談したり、信頼できる人に相談したいと考えるなど、人で相談先を選ぶ場合があります。困難を抱える学生にとって、相談をすること自体にハードルがある場合は、特にそうした傾向が出やすいでしょう。支援の充実が進みつつある現在、どのような相談があっても受け止められるよう、支援の提供側の連携や相互交流が求められていると言えます。

2022 年度の第1回教学実践フォーラムでは、ライティング支援に関わる3つの事例を紹介いただきました。本フォーラムの事例が、今後のライティング教育の展望を議論する契機になることを期待します。

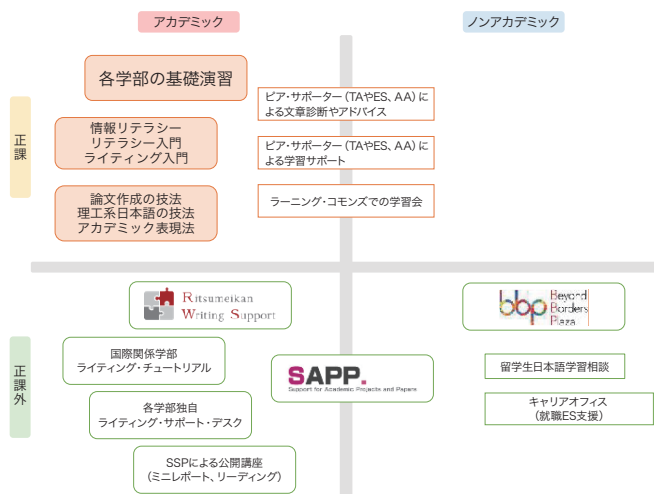


図1 学内のライティング支援の状況
2021 年度教学総括を参考に一例を記載しています。

全学共通ライティング・サポートの成果と課題

～ 1 年半取り組んだ支援者の立場から～

立命館大学 教務課 専門契約職員 森 若菜

立命館大学 教務課 専任職員 大田桂一郎

立命館大学大学院 法学研究科 博士課程後期課程 2 回生 冠野つぐみ

立命館大学では、全学共通ライティング・サポートとして、2021 年 4 月に「ライティング・サポート室」を開設した。本稿では 1 年半取り組んだ「支援者」の目線から取組み状況、成果、課題を報告する。

1、「ライティング・サポート室」の概要

はじめに「ライティング・サポート室」の概要についてふれておく。「ライティング・サポート室」は学部生（特に初年次生）を対象にレポートの書き方などの支援を行う「学修支援窓口」である。発足の経緯は、2019 年度全学協議会において、正課における教育の質向上などが議論の論点となったことだが、開室形態を含め、支援の方針等、詳しくは ITLNews51 号で記載しているのでそちらを参照されたい。

支援の中身について説明する。下図は、「ライティング・サポート室」が想定している支援のレベル層について説明したものである。

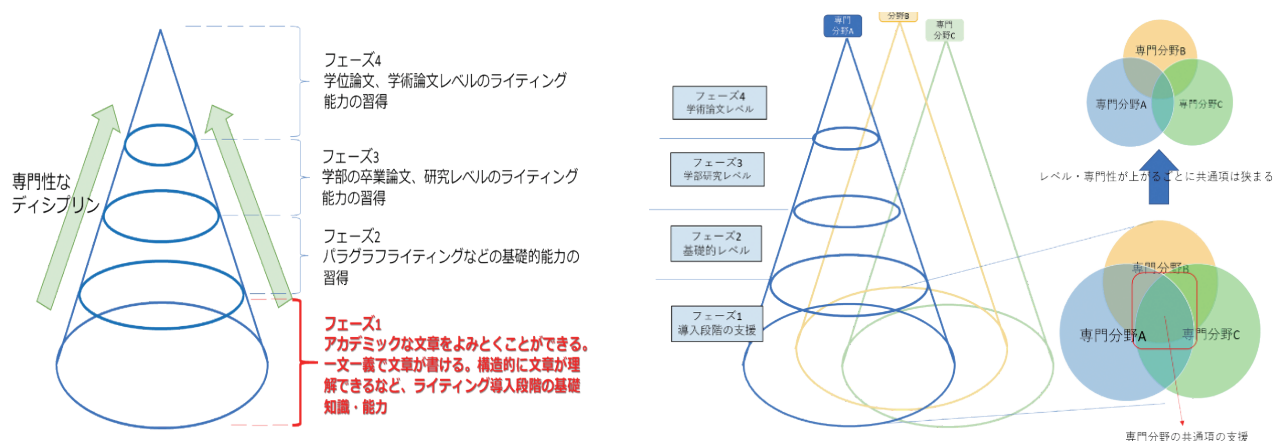


図2 支援のレベル層ならびに支援層

「ライティング・サポート室」立上げの際に想定した支援レベルは、学生が学部で専門分野を学んでいくための土台となる文章作成能力の涵養、「フェーズ1」と表記したライティング導入段階の支援である。それに加え、立命館大学では 16 学部 21 研究科（2022 年 9 月現在）と多様な専門分野が存在する。学生が各学部でより深く学べるよう、分野の共通項となるライティング支援を目指した。そのため、支援の方針として、学生が自身の力で主体的にレポート等を書くことができるよう支援を行うことを目指しつつ、学生の背景にある「専門分野」を尊重することに重きをおいた支援を行っている。

2、支援をする立場から

支援の内容を記載する前に利用者数の推移についてふれておく。右表は 2021 年春学期から 3 期にわたっての利用者数の推移である。2021 年 4 月より、専門の職員 1 名からという支援体制のもとスモールスタートで始めたが、年度を追うごとに利用者数は増加傾向にある。

支援の内容にふれるにあたり、チューター TA がチュータリング終了後に作成している指導記録を参照することとしたい。

	2021年春	2021年秋	2022年春
1回生	57	15	149
2回生	32	36	33
3回生	12	10	23
4回生	15	30	4
5回生以上	33	33	10
合計	149	124	219

※ 2022 年春はセミナー & 相談ワークショップ
申込者も含む ※集計は延べ人数

2022 年春学期の記録からは、相談があった学生に対し、おおよそ下記の 4 つについて支援を行っていることが分かった。

- ・参考文献や引用、論文検索の方法について、アドバイスをを行った。
- ・文章（レポート）を一緒に確認しながら修正が必要な箇所や主張から本論の論理性を考えた。
- ・レポートの構成や内容について、一緒に推敲し、ブラッシュアップする手助けを行った。
- ・相談者自身の問題意識をヒアリングし、リライトが必要な箇所や（プレストを含め）問題点を整理した。

チューター TA らは非常に丁寧な支援を行っていることが分かる一方で、相談内容は多様化している。右図は、2022 年春学期の相談レポート科目別集計結果である。おおよそ 57% が専門科目の相談であることが分かる。支援を行うスタッフやチューター TA は、相談学生自身の成長に貢献ができていることに達成感を感じている一方で、相談の多様化（主に専門分野に踏み込んだ質問や相談を受けることがあること、より高次元なレポートの相談があること、英語ライティングの相談があること）について、課題を感じている。ライティング導入段階、分野の共通項を支援するという方針がある一方で、目の前の学生に対しどう向き合っていくのか、今後の検討要素でもある。

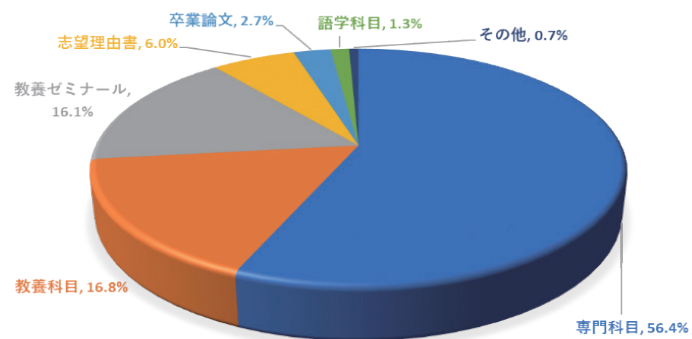


図3 2022 年春学期相談レポート科目別集計結果

3、今後の課題

今後の発展的な課題として、下記 3 つが挙げられる。

①相談の多様化への対応

本稿の冒頭でも言及しているように本学内には多様な学習支援リソースが存在する。支援ごとに役割や目的があることは前提としつつも、多様化する相談に対応するために、よりシームレスな学習支援窓口間の「連携」「つなぎ」が必要であると考ええる。

②学部教学との連携

「ライティング・サポート室」の取組を始めて 1 年半が経過した。着実に利用者は増えているが、より多くの学生が主体的にレポートを書くことができるよう支援の幅を広げるため、また①で課題とした専門分野への質問等へ対応するため、学部教学や授業そのものとの連携が不可欠であると考ええる。

③英語ライティングに向けた対応

英語ライティング支援については、本稿でも紹介されている BBP (Beyond Borders Plaza)、SAPP (Support for Academic Projects and Papers)、それに加え国際関係学部ライティング・チュートリアルといった素晴らしい取組みが学内で展開されている。しかしながら、それぞれの支援層から、本学においては所謂ミドル層をカバーする枠組みは空洞化しているのではないかと考えられる。そのため、全学共通で英語アカデミックライティングのミドル層を支援する枠組みが今後必要となってくるだろう。

最後になるが、本稿は全学共通ライティング・サポートを進めてきた「支援者」の主観から述べているものとなる。引き続き、より良いライティング支援を目指して、これからもライティング・サポートの取組みに邁進していく。

Needs vs. Wants

BBP 英語自律学習サポートデスクでの英語ライティング支援について

立命館大学言語教育推進機構 青木 幸子

【BBP 英語自律学習サポートデスクでのライティングの取り組み】

Beyond Borders Plaza (BBP) の英語自律学習サポートデスクは、正課外で外国語学習者の自律的な学習を支援し、学習相談に応じる場である。特に、英語のライティングサポートデスクでは、ライティングに特化したアドバイスをマンツーマンで行なっている。学生がこのサービスを利用するためには予約が必要（BBP ウェブサイトトップ>各種サービス情報>英語自立学習サポートデスク>キャンパス毎のスケジュールの確認>予約フォーム）で、相談時間は1回20分である。アドバイスは言語教育推進機構および言語教育センター所属の外国語専任講師と外国語嘱託講師で担当している。しかしながら、現状では、認知度が低く、サポートデスクを利用している学生数は限られている。

【学生からの相談の内容とサポートデスクの対応の可否でのジレンマ】

ライティングサポートデスクでの相談は、英検、IELTS、TOEFLなどの試験の対策が多く、他には英語でのメールの文面、外資系企業のエントリーシート、海外の大学院の志望理由書など多岐にわたる。学生は各種試験のライティングパートの対策の相談では、添削や校正を望んでいるようだが、BBPでは、完成した文書の添削や校正ではなく、文面におけるフレーズやニュアンスなどに関するアドバイスや共に英語を推敲することを通して、自立学習・自律学習を促すような支援を目指している。故に、担当の外国語講師は、指導というより、学生の主体性を育てるアドバイスを行うようにしている。そのため、学生がサポートデスクに期待することと対応の可否にズレが生じることもある。背景として多くの学生が英語のライティングに不慣れであったり、日本語と英語のエッセイの構成やレトリックの違いをあまり知らなかったり、英語で書いた内容よりも文法や表現の正誤に注目をしていたりするため、校正をしてほしいという要望につながるのではないと思われる。繰り返しになるが、サポートデスク担当者は学生の要望とは異なり自律サポートへの支援を主に行なっているため、ジレンマが生じることがある。また、他の問題として、ネイティブスピーカーの担当者のサポートデスクを利用したい学生の中には、英語の習熟度が壁になって利用を妨げてしまうこともある。

【今後の課題】

BBPの英語自律学習サポートデスクに関しての課題はその認知度の低さである。今回の教学実践フォーラムを機に、利用数が増えることを期待している。

本来BBPでの英語自律学習サポートデスクが目指している学生の主体的な学びを促進するためには、高校から大学における英語のライティングの経験や意識のギャップを埋める必要があるように思われる。本格的に大学でアカデミックライティングをする前に、英語のエッセイの構成やレトリックなどに意識を向けるようなライティングの経験が必要なのではないかと思う。

BBPでのライティング支援は、正課外のものに限られていて直接的に授業の課題レポートやリサーチペーパーなどの添削サポートは行っていない。他の支援機関と連携し、BBPの英語自律学習サポートデスクでのライティングのアドバイスの取り組みが全学的なアカデミックライティング力の向上に少しでも寄与できることを願っている。

高校・大学・大学院につながる英語ライティング指導と支援

ー協働体制の構築を目指してー

立命館大学生命科学部 山下 美朋

英語で書く力は、母語である日本語で書くことを基本としながらも長年の訓練でしか得ることはできない。しかし、初年次の学生に見る英文は、パラグラフの概念が欠如していることが多い。基礎教育の二年間でしっかりとした英文を書くように指導するのは、到底困難である。本稿では、高等学校（以下、高校）から大学院につながる英語ライティング教育の視点から、専門分野の教員や学生を巻き込んだ協働体制の構築の必要性を、筆者の取り組みを例に述べる。

まず、高校でアカデミック・ライティングの基礎的な指導と訓練を行っておく必要がある。しかし、4技能の中でもライティングの指導は十分ではないと報告されており（山岡, 2019）、その理由として Hirose & Harwood (2020) は、国立大学の二次試験を除いて大学入試にライティングがないことや、高校現場が抱える様々な問題（クラスの生徒数が多いことなど）を挙げている。一方、2022年度から新学習指導要領が全面的に施行され、発信力を高めるライティング指導ならびに論理的思考力を醸成するための「論理・表現」が導入されている。筆者らは、この改定を好機と捉え、2020年度から、英語ライティング指導を高大の教員がともに考え実践する授業研究を始めている。大学では当たり前になっているが高校ではまだ行われていないとされる様々なパラグラフタイプを、まず1パラグラフから段階的に複数パラグラフにする、しかもプロセス・ライティングを導入した指導である。それを授業計画から教材に至るまでを両教員と一緒に考える。理論ベースの大学教員が指導力のある高校教員と協働で行うこの実践授業を通して、高校教員は指導に自信を持つようになり、また我々大学教員も高校の現場から多くを学んでいる。なにより、この実践や教材を多くの高校の先生方と共有することで、パラグラフをしっかりと書ける高校生が育つことが最終的な目標である。

大学と大学院でのライティング授業では、ESP(English for Specific Purposes: 専門英語教育)つまり、研究論文などのより専門性の高い内容を英語で書く指導が中心となる。筆者が所属する生命科学部では、プロジェクト発信型英語プログラムを展開しており、学生が興味・関心から様々なプロジェクトを遂行し、その成果を英語で発信しているが、2回生後半ともなるとプロジェクトも科学に特化した内容になることがある。その英語の正確性を判断するのは英語教員だけでは及ばず、生命科学部の専門教員、またはTAとの協働体制で解決してきた。例えば、3回生春学期配当のJP1(Junior Project 1)では、15週のうち5週に渡って専門教員が学生のプロジェクトに科学的な見地からアドバイスをを行い、英語教員は英語の専門性に特化した指導を行っている。また、筆者が担当する大学院科目「科学技術表現」においてもこの教員間の協働体制は保たれており、筆者が一般的な科学論文の構造・内容、英語表現を教えたあとに、4学科の専門教員がそれぞれの分野に特徴的な論文を紹介するという流れになっている。学生は、専門分野により論文の形式や使われる英語表現が異なることや、研究が学際的であることを学び、知り得た知識をもとに自分が行っている研究の要旨を英語で書き、口頭でも発表する。本年度は、要旨を校正業者に出し、より英語に磨きをかけた。なにより活躍が目覚ましいのが、正課外でのライティング支援センター SAPP (Support for Academic Projects and Papers) のTAたちである。彼らは既に研究の経験が豊富であることから専門家の立場として、また気軽に相談できる先輩として主に学部生のプロジェクトの相談に乗っている。

このように高校では、基礎教育としての英語で書く指導、そして大学から大学院では専門教育のなかで研究を英語で書く指導と目的は異なるが、それぞれのステージで教員同士が、英語の教員が専門の教員と、またTAにも参加してもらいながら協働体制を構築してよりよい指導が行われるべきである。生命科学部の体制は、シラバス改定にも係る話であるため、どの学部でも叶うわけではないかもしれない。しかし、ライティングサポート室やBBPなど学内のリソースも利用しながら、学部の垣根を超えた協働体制ができればと願う。

- 山岡憲史 . (2019). 『「論理的思考力・探究心」を育てるアカデミック・ライティング—言語の枠を超えた「書く」指導のあり方』
2019 年度立命館大学第一回教学実践フォーラム .
- Hirose, K., & Harwood, C. (2020). Factors influencing English as a foreign language (EFL) writing instruction in Japan from a teacher education perspective. In L. Seloni, & S. H. Lee (Eds.), *Second language writing instruction in global contexts* (pp. 71-90). Multilingual Matters.



立命館大学教育開発推進機構 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL : 075-465-8304 FAX : 075-465-8318 email : fd7lcer@st.ritsumeai.ac.jp <http://www.ritsumeai.ac.jp/itl/>

発行日 : 2022 年 11 月 編集・発行 : 立命館大学 教育開発推進機構